vinetur

フランスのレビュー、ブドウ台木はワインの化学成分より収量に大きく影響と指摘

約60件の試験を分析した研究者らは、台木の効果は地域の土壌や気候、接ぎ木する品種に大きく左右されると指摘

2026年11月12日（木）



フランスの研究者と業界団体は、ブドウ台木に関する試験を幅広くレビューし、干ばつなどの気候変動の影響に対応しようとするブドウ園に向けた指針を整備した。その結果、台木の選択が樹勢と収量に及ぼす影響は、収穫したブドウの酸度やアルコール度数に対する影響よりもはるかに大きいことが確認された。

この調査は、フランスの国家ブドウ園持続可能性計画の一環であるPGVigne.netプロジェクトを通じて、2023年から2026年にかけて実施された。Réussir Vigneによると、プロジェクトには約60件の試験結果が集められ、広く植えられている台木から、使用例の少ないものや外国由来のものまで、約20種類が対象となった。よく知られた台木に関する知見を深めるとともに、これまであまり使わ

れてこなかった台木について、より詳細な全体像を把握することが目的だった。

フランスワイン・ブドウ研究所（IFV）の植物資材エンジニア、Taran Limousinは、台木の選択は気候変動にブドウ園を適応させるうえで重要な手段であり、とりわけ樹勢や水分不足への耐性に影響すると述べた。こうした知見は学術研究の枠を超えて意義を持つ。今行われる植栽の判断は、ブドウの供給量やブドウ園のコスト、数十年にわたる耐性を左右し得るため、台木に関するより精緻なデータは、幅広い飲料業界に関わる栽培農家や苗木業者、アドバイザーにとって重要となる可能性がある。

分析では、CTNSPの選抜パートナー、EspiguetteにあるIFVの施設、ボルドーのINRAE研究所の試験結果に、ブドウ苗木業者からの情報を組み合わせた。レビューでは、台木によって樹勢と収量に差があるという既知の傾向が確認された一方、こうした結果は気候や土壌、台木に接ぎ木する穂木品種など、地域ごとの条件に大きく左右されることも改めて示された。

アルザスワイン業界委員会のArthur Frohelyは、こうしたばらつきがあるため、結果は固定的な規則ではなく傾向として捉えるべきだと述べた。また、分析で確認された台木による収量増加は限定的で、最大でも14%だったと付け加えた。シャラント地方のブドウ園保全施設のSébastien Julliardは、最も樹勢の強い台木が必ずしも最高収量をもたらすわけではないと指摘した。この点は、干ばつへの適応や生産目標について単純に考えることを難しくする可能性がある。

一方、プロジェクトでは、台木の選択が酸度とアルコール度数に及ぼす影響はごく小さいことが分かった。この結論は、台木がブドウの成分をどこまで変えられるのかについて、期待値を絞り込む助けとなる可能性がある。ワインのスタイルやバランスを重視する生産者にとって、台木は最終的なアルコール度数や酸度を直接調整する手段というより、栽培上の基礎的な判断として重要であることを示唆している。

レビューでは、乾燥条件下での活用が期待される、333 EMや140 Ruなど、あまり知られていない樹勢の強い台木にも注目した。プロジェクト関係者によると、これらは干ばつへの適応力を高める可能性がある一方、実用上の制約もある。Julliardは、最も樹勢の強い台木の一部は生産が難しく、苗木業者にとって魅力が薄れると述べた。また、197-17 Clなど一部の候補は石灰質土壌に適さず、植栽できる地域が限られるとも指摘した。

プロジェクトは圃場試験の結果をまとめるだけにとどまらなかった。IFV Grau-du-Roiでは苗木の活着に関する測定も行われ、平均活着率は63%だった。報告書によると、この結果には台木よりも穂木品種のほうが大きく影響した。また、苗木業者を対象に台木の栽培や接ぎ木の方法について調査し、圃場データに商業面・技術面の情報を加えた。

主な調査結果は、生産者やアドバイザーが選択肢を比較できるようにするプラットフォーム、PlantGrapeのウェブサイトに掲載される予定だ。Limousinは、情報の統合によって現場での台木選びを支援できると述べた。PGVigne.netの主な成果を紹介するウェビナーは、12月15日に開催される予定だ。

これと並行して、フランスの公的な国家カタログに新たな台木を追加する別の取り組みも始まった。CTNSPの加盟団体からなるグループが、母樹園での品種評価と、北部・南部・海洋性気候の条件下で台木が伝える形質の評価に着手しており、シャンパーニュ、オード、シャラントに試験区を設け

ている。2026年以降は、有望な候補の評価範囲を広げるため、他地域でも簡素化した試験手順が導入された。

Julliardによると、2028年までに、グループはBC 2、1447 Paulsen、34 EMなど、すでに登録されている品種の一部について、増殖をより広く進めるべきかどうか判断できる見通しだ。また、Ramseyや107 Vidalなどの品種について、新規登録が検討される可能性もあると述べた。

更新されたデータが公表されるのは、フランスのブドウ園が世界各地のワイン産地と同様、熱波や水ストレスの頻発に直面するなかでのことだ。台木の選択は通常、ブドウ園が本格的な生産に入るずっと前に行われ、植樹後に変更するのは容易ではない。こうした状況において、樹勢や収量、干ばつ耐性、苗木の生産性に関する知見の蓄積は、今後のブドウ園の改植を左右し、ひいてはワイン取引で使われるブドウの供給安定性にも影響する可能性がある。